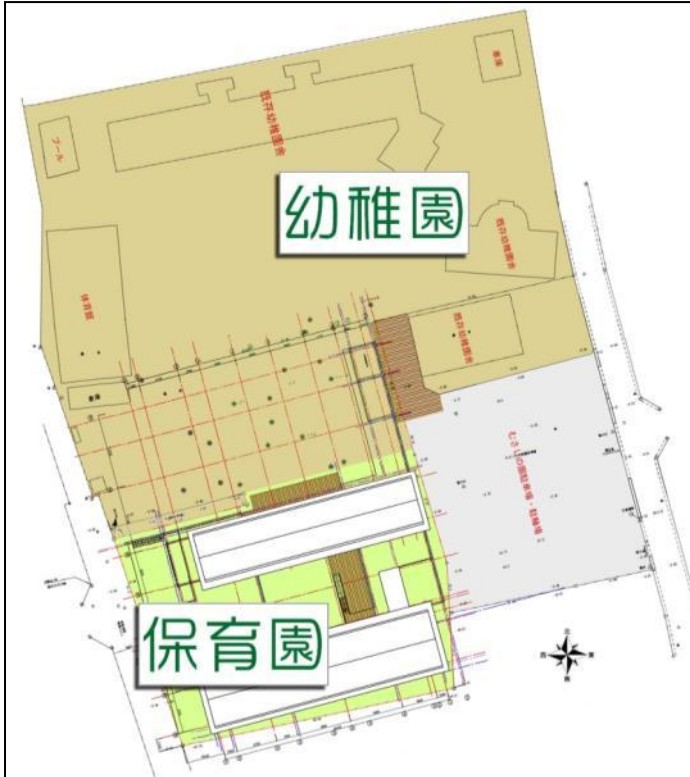


# えっ？一体化は大反対？

## 平成 22 年、認定こども園の認定を受けた東村山むさしの幼稚園 市内初の幼保一体化施設なのに？

前号では、隣接保育施設設立に関する経緯について概略を掲載したのですが、発端と実行への深さを辿れば、教育・子育ての現状・法制度対応・これまでの道筋・様々な思惑…。これまた膨大な量になってしまいます。その前に、市内で初の「認定こども園」となった“むさしの”、おそらく、幼保一体化に対し、いち早く進んでいると思われるでしょう。しかし私は、極めて幼保を一体化する事に対しては、反対、というか明確に役割の異なる双方を、その理念を遵守しつつ一体化することは不可能であり、安易に行った場合、それは各々の理念の崩壊を招きかねない混同であると、事あるごとに意見してきました。（裏面に過去の参考資料。そのうちの一遍だけですが。）

「両方のいい点を融合」がキャッチフレーズだったのに 入ってみると3歳以上はまるで幼稚園。」  
「保育園→幼稚園(べつ場所にある)とステップを踏むのですが、幼稚園になると保育料が倍！おまけに普通に幼稚園児の家庭と同じ立場になるので、平日の行事参加など、負担が多い。」  
「了承して入園させたものの…働く親にとって、参観日や平日行事に参加できず…」  
年齢区分。「幼稚園へ保育園児の3歳入園時に父母会が崩壊しました。」



幼保の一体は、とても難しき課題が山積しており、全国各地の一体化施設において、他にも、たくさん報告例があります。しかしながら、幼稚園にも長時間保育が望まれ、保育園にも教育が望まれている今。今後はどう関わり合っていくのでしょうか。心配なところ。幼と保は、どちらも非常に大切な役割を備えていると同時に、与えるものも違えば、子育て家庭と就労家庭各々のニーズも異なります。そこで、互いの理念と環境を保持するため、幼保の混同に向かうのではなく、併設という形で、これまで以上に幼と保の立場を明確にし、連携の取れる体制に向かっているのです。

### 良きものの創作は、個々の施設の努力あってこそ。 制度・政策に委ねた経営では甘いのでは？

合理化と効率化を同時に進めつつ、互いの施設の連携により足りないものを補い合い、相互の質の向上を目指します。幼保連携施設として既存幼稚園の隣接地に設置される保育園での子どもたちの日々の活動は、幼稚園側からの多大な恩恵を受け続けることとなります。駐車場にしてもそう。新たな整備費用を投じず、近隣路上の環境悪化も抑えられ、送迎時の安全対策も万全となります。

都庁窓口でのひとコマ …

互いに重なり合う業務も多い幼保連携両施設。「管理室を統合し、業務、機器備品、人員、様々なものの節約を含め質の向上を狙いとされた合理化と効率化を目指しているのですか？」と、説明したところ、「ダメです」とのこと。保育施設には厨房を新設するので、「幼稚園児にも給食の提供をしてもいいですか？」と質問したところ、「ダメです」。その片側の施設、しかも、同一敷地内にてそのような整備をするならば、より有効な連携をすることで、消費を抑えつつ多くの子どもたちに良き環境を広められるのに。提供する数が増えれば一食にかかる負担も抑えることができるのに。「これも？」「あれも？」。保育所整備に関して東京都の窓口から制約を受ける事、それはそれは莫大な量。相互作用の恩恵を利用しつつ合理効率化を目指し、量と質の向上を目指すべく努力。そういう末端での、現場でのノウハウに支えられた努力や実行こそが、子育ての負担の軽減、事業費の節減、整備費の削減、税金の効率的な運用を具現化し、効率的に良き環境の構築や維持を続けることが可能となるかと思うのです。そして書類。昨年 10 月にスタートして以来、重ねれば 1メートルは超えるでしょうね。そのほか、多くのメールやアナログでのやりとり、日々問いかける質問。図面や文字だけで判断しなければならない所轄の立場もわかりますが、果てしなく続く対応の数々。その背景には膨大な書類の準備作業があります。園長として現場を統括しつつ、園児や保護者の皆様への、あらゆることに前向きな日々を与えていきたいと思う貴重な時間の多くが犠牲になっています。

窓口、それは様々な施設の制度遵守、また、安全への砦だとも思います。そしてまた、良き社会づくりへの窓口でもあると思います。通り一辺倒で、「禁止」や「ダメ」を口にするのではなく、もっと心をもって、良きものに向かっての「方法」などを共に考え、相談ができるような窓口であってほしいと日々願いつつ、がっかりする局面が多いのが事実です。でも、それら、多くの対応や難題を自ら経験することも、「何が足かせとなるのか？」「なぜに幼保の良き関係が築けないのか？」リアルな学びの場とも感じる事ができています。

ただし、わかりますけどね、背景も。緩めれば合法化に甘んじる人間がいる。緩めれば悪用する人間がいる。

「モラルの低下が規則を招き、規則はモラルを欠落させる。」

隙間があれば食いつく人達。規則だからと対処せざるを得ない行政。法治国家ゆえのたどり着く先。法と政治を学んできた経過における、私自身の中でも解決困難な、人間ありき社会の大いなる諸問題の問題の根源なのだと思います。

ただし、そこでの勇気と行動力と、そして、適切柔軟な理解と協力。もしかしたら、そういう心を持つ熱意ある人達により、世の中が変えるかもしれないんです。事業者も努力をしています。現場の職員たちも努力をしています。関わる人たち皆、「良くしていこう」と、ちんとした「努力」と「仕事」をして頂きたいと、切に願うばかりですね。

筆者紹介  
**東村山 むさしの**  
認定こども園  
園長・野澤貴春



1971年1月、市内廻田町に生まれる。  
1983年、東村山市立回田小学校卒業。  
1986年、同、東村山第四中学校卒業。  
1989年、明星高校卒業。  
1993年、中央大学・法学部卒業。

法律・政治を学ぶ傍らスポーツ活動にも力を入れ、卒業後は実業団にて選手活動。  
国民体育大会入賞数回、ジュニア世界選手権日本代表、東京都スポーツ優秀選手賞等、多々受賞。中学校教諭一種免許、高等学校教諭一種免許、大型自動車運転免許、Microsoft Office Specialist、等取得。

1997年、園の学美化に合わせ、学校法人野澤学園勤務。  
2008年、同園、事務長を経て園長へ就任。

### 幼児教育普及の為に保育園 子ども達に、少しでも力を！

いまだ抱える待機児問題。預ける先が無く困っている家庭が現存します。幼児教育を受けさせたいも、時間的都合で幼稚園は選べず、とにかく空きが出るのを待っている家庭もあります。

プレハブ、駅前、基準の緩和…。待機児解消への政策を取らざるを得ず、そこに子どもたちが預けられるのであれば…

既存の恵まれた施設設備、広い園庭、教育ノウハウ…。幼稚園の隣に保育園を作れば、多くの恵まれた環境で過ごせる子どもたちが増えるのです。そして、就学前教育、むさしのが伝えたい教育を受けられるのです。

私は、幼児教育の普及と発展の為という意味も含め、保育所を計画しました。そして、子どもたちと社会を支える幼稚園と保育園の2本の柱。どちらの施設も、どちらの制度も、今や就学前の健やかな子どもたちの成長に大きく寄与しています。その、制度の違う両施設を経営し、両制度に深く足を踏み込み勉強することこそが、子どもや家庭を取り巻く社会に対し、また、幼保の連携に関し、さらに良きものを目指すために、様々な現場でのノウハウをもとに提案し構築するために、教育機関である幼稚園としての大きな使命でもあるのではないかと考えています。

### 事業主としての使命

質の向上を伴う合理化と効率化を成し得、生き残る。  
「私学・福祉・幼保連携」三つ巴の体制。

私学側に存在する助成制度。保育所にしかないものも。また、連携施設にだけ優遇された措置も多々。その全てを有効に活用させていただく布陣を実現するのです。どのような制度となっても、施設にとって最善最良の優位な形での経営ができるよう、体制作りを目指しています。

連携により幼保相互の質の向上が実現でき、かつ、併設による統合を生み出すことで、合理化と効率化を成し得るのです。「まあ、幼・保の溝が埋まるどころか開いてしまえば、幼稚園と保育園の間に塀を作って個別に運営しますけどね。」いざとなれば、そのくらい対応力も考えた上です。

国だって、この先々の財源には多大な難題を抱えています。都や各市町村にしてもそう。そのような先々に対し施設運営への助成が減ったとしても、単体での合理化・効率化の進んだ施設は最後まで耐力を残すことができることは言うまでもありません。そういう努力は、しいては、保護者負担の増加を防ぎ、子ども達の環境である施設整備を疎かにすることもなく、働く教職員の待遇の維持・モチベーション維持にもつなげることなのです。

そう、昔から「夢」は抱きませんでした。しかし「目標」は掲げます。目標とは、様々な要素から達成可能であると判断した故に掲げるもの。「目標」とは、必ずや達成すべき課題であり、達成するために、その道を歩み続けるものと捉えています。目指すは日本一です。というより正確に言えば、今、最大限、何ができるのか。施設・環境・内容・利用者・職員双方の満足度、全てに言いです。実は、毎年目標を掲げています。園長1年目の目標は「対応」、2年目は「実行」、3年目は「形」、4年目は「耐力」、5年目の今年度は「構築」なんです。先々へ向けた、大きな器での構築。「今は順調に経営できているから」など、何のあてにもなりません。超少子化時代も見えています。そして、財源の減少もあるかもしれません。しかし、どんなに厳しい将来においても、保育と教育の場は消えることは無いでしょう。ただし、分母が少なくなれば淘汰される施設はたくさん出てくるでしょう。いかに経営を維持するための色々なものを削らざるを得ない施設も出てくるでしょう。そこで、どれだけ条件よく経営を続けていくことができるか。常に先々を見極めなければならないのです。また、万が一、将来ずっと幼・保の経営が安泰な社会であっても、その努力は継続的な他施設との差を生み出すことにもつながります。努力は無限。惜しまず続けることが大切であると思います。

むさしのグループ？は、来期70名超のスタッフを抱える大規模な施設へととなります。そんな、むさしのにとって一番大切なのは、言うまでもなくスタッフたち。だって、常に私が日々全てを指導し行動しているわけではありません。子どもや保護者と日々接している教職員皆が「むさしのの顔」。「小さな歯車でも、ひとつが欠ければ大きな信頼を失いかねない」、その深き意識の浸透とともに、各自の役割を明確にする故の部課構造強化の意味云々…。そういった社内構造改革にも力を注いでいます。多摩地区のみならず23区を含めても、付属学法を除き、個人・単独学法・宗教法人の中において、それを上回る給与体系を実現しています（それでも業種別に見ると低すぎるとは思いますが）。実際は厳しい裏側もありますが、これからの改善が、現状の維持とともに更なる環境を作るのです。

「個々の能力が、むさしのを支え、それは、しいては子どもや家庭、社会を支え、結果は我にも返ってくる。」むさしののスタッフであるならば、それなりのプライドを持って欲しい。もてるような職場にしたい。そして、理解できないのであれば、迷わず他で働くことを勧めます。「何が、今のむさしのを支えているか？」それは、一人ひとりの教職員。地域保護者のご理解とご協力も欠かせませんけどね。社内教育に関しても惜しまぬ努力を続けていきたいと思っています。

むさしのの  
が園長  
の書く

新聞

Vol.2

幼保を取り巻く現場からの情報誌。私的な思考も含めた乱筆なる走り書きの紙面であり、誤字脱字、誤記、誤解等あるかもしれませんが、ご容赦頂きたいと存じます。





## 【資料】 幼稚園と保育園、そして、家庭。 つまりは、就学前の子ども達のあり方について考える。

最近の民間の調査で、こんな数字が出ていました。

幼稚園と保育所を一体化させる施設の導入に関し、幼稚園や保育所などの賛成は26・6%、反対が46・8%。

政府は幼保一体化施設「総合こども園」の創設を盛り込んだ新子育て施策関連法案の成立を訴えているが、子どもを預かる現場に異論が根強い実態が示された。一方、幼稚園、保育所それぞれに通う子どもの親の回答をみると、一体化施設に賛成が幼稚園で40・0%、保育所では43・5%。反対は、幼稚園15・5%、保育所12・0%で、親の方が肯定的にとらえているようです。

反対の理由を詳しく知りたいですね。また、賛成の理由も。ところで、連携はどうですか？とも。

では、私の意見は … 「幼保混同は大反対。幼保の連携は大賛成。」「一体化は無理でしょう。というか、すべきで無いのでは？」

さて、様々な議論が飛び交う中、今後の就学前教育・保育の行く先を気にされている方も多いかと思われます。市内初の「認定こども園」として、幼保一体化施設として認定を受けた「東村山むさしの幼稚園」。実は、「幼保一体化、というか、混同」には大きな懸念を訴え続け、同時に、「連携」の効果と可能性に関し模索をしてきました。

### 「緩急、強弱、量と質。長時間保育における子どものリズム。」

認定こども園となる前の「東村山むさしの幼稚園」。幼稚園教育以外の時間帯、長時間預かりを利用する子どもたちは、朝、子育て経験のある預かり保育のスタッフで運営され、隣接しつつも園舎から離れている保育スペース、「おひさまハウス」で迎えられます。そして、幼稚園の開始時間になると、そこから、「いってきま〜す！」と、幼稚園へ通います。幼稚園教育を受けたのち、教員による教育の下から離れ、再度、家庭の代わりである「おひさまハウス」へ、「ただいま〜！」と、帰っていきます。そこから、課外教室に通ったり、疲れた子どもは午睡をしたり、その子に応じた日常生活を過ごし、ご家族のお迎えを待ちます。認定こども園認定後の今も、その形態は変わりません。

### 「限られた時間、けじめの中で教育を学び、家に帰り心温まる家族の中で、常識を肌で吸収。」

本来、子どもは精神的な緩急でもある家庭と外とのバランスの中、様々な精神的影響を受けています。なぜに、「幼稚園の担任が預かり保育に携わらないようにしているのか？」また、「施設をあえて幼稚園の教室とは別棟に設けたのか？」…東村山むさしの幼稚園の預かり保育や長時間利用児に対する考え方の根本は、ここにあります。教育機関としての教育効果を高めるのであれば、同じ教育施設にて、同じ空気、同じスタッフによる預り保育さえも行うべきではない。そのくらい、こだわりがあります。また、4時間の教育と、それ以外の家庭の代わりとなるべきである保育は、長時間保育に特化した施設整備が成された「保育所」にて行うことが理想であるとも考えています。

社会性を養うための糧である「厳しさや我慢」に耐えうる教育をするからこそ、様々な秩序の異なる社会で生きていけるようになります。だからこそ、「郷に入れば郷に従え」、「外の飯を食らう」、という言葉も生まれたのでしょうね。また、集中すべき時間とケアの時間のバランスの上で子どもは救われます。そのリズムを与えつつ、心の安定とのバランスの上で、より質の高い教育を目指せることにもつながります。故に、幼稚園教育の狙いを超える、幼稚園教育の枠を超えた預かり保育や長時間利用の時間帯は、元来、幼稚園の目的とする教育とは異なるものであり、家族や地域の中で過ごす子ども達の時間に、出来るだけ近づけるよう配慮した空間であることが望まれます。

故に一見、幼保一体化の一政策に対し、いち早く進み、認定こども園化をした我が園においても、それら子どもの心に目が向けられず、待機児解消のための量的解決ばかりが主導である「幼保一体化」には懸念を抱かざるを得ないのです。そして、「幼保一体化反対」を正確に言うと、体系を崩した「幼保一体化」という名の「幼保混同」は避けるべきだと捉え、強いて言うならば「幼保連携が理想の形」を目指すべきかと思うのです。

現在、続々と、幼保一体化施設が整備されています。様々な施設の内外も見て来ました。時に現状への迅速な対応も社会背景を担う上で必要かとも思いますが、様々な事情により、まばらな環境での一体化が進められようとしています。また、幼稚園でも、「預かり保育」と言う幼稚園教育時間外である「保育」を行っている園も増えました。保育園に関しても様々な施設が見受けられ、就学に向けた教育を取り入れている素晴らしい保育園も存在していました。なのに、未だ「保か幼か云々」といった頑ななご意見も多々伺えます。確かに、幼稚園と保育園には、それぞれ譲れない、かつ、互いの中で役割を補いきれない素晴らしい長所や特色、それを育ててきた歴史があります。

**余剰空間、教員を利用する形における幼稚園での  
安易な預かり保育は、教育施設としての質の低下  
を招きかねない保育事業とさえ厳しく懸念。  
長時間の「保育」に相応しい隣接の施設が担う。**

先々、幼保一元化や認定こども園構想が、どのように進んでいったとしても、この「4時間の教育時間」という、就学に向けた子どもたちへの「高い教育の確保」という観点での時間的・精神的区切りは継続しつつ、親子ともども就学時レベルの向上を目指すとともに就労を支援できる「教育と保育との両輪」により、年齢相応、継続的な保育と教育の関わりを強化すべきかと考えます。

方向性と具体策が打ち出されつつある社会保障制度の個別分野である「子ども子育て支援」。新システムへの事業計画を実情に合わせて行うことが市町村に投げかけられています。進められる幼保一体化の中で、「質の高い学校教育・保育の一体的提供」「保育の量的拡大」「家庭における養育支援の充実」、その幼保一体化の目的とされる3点を満たすシステムの整備、子どもと家庭の内面にまで入り込み、量と質を兼ね備え、ともに育てる保育と教育の環境整備を今ここで行わなければ、きっとそれは後世に対し歪みを残してしまうかもしれません。

以前、近隣の保育所に「遠慮せず遊びにいらしてください。」と声をかけたところ、日中、保育園児たちが幼稚園に遊びに来てくれました。各施設ごとの幼保の連携が難しいのであれば、市内の幼保が協力し合うことも可能であるというプランを表に出したこともあります。幼稚園には園児用バスがあり迎えに行けます。保育園の子どもたちにも、適齢なる時期に、「行ってきます」と幼稚園へ通い、就学前社会集団教育を受ける機会を作る。また、園の環境によっては預かり保育の代わりに、幼児教育時間終了後、保育園にもバス停を設け、そこで預かり保育を行うなど。既存の幼保各施設が一同に幼保一体に向かうことは各施設的に困難な場合も多くある現状。しかしながら、市内の各施設が連携を取ることで、就学前の子ども達の環境は、より良い方向へと改善できる方法も多々あるのではないかと感じています。その点において、国は地域の実情に応じて各市町村による独自の計画を求めている点からしても、市内就学前教育・保育のプランを構築するチャンスでもあるのではないかと感じている反面、それを実現するためには、各施設が並ならぬ努力と協力を惜しまず子ども達のために尽力しなければならないかと思えます。その先駆けとして、まずは同一法人内で幼と保の理想的な関係構築に向けスタートする機会に恵まれました。結果が好ましいものであれば、是非、近隣各所の施設においても、また、施設を超えた連携であっても、少しでも良い構築のモデルになればと思い、そのような観点からも、今回の総合施設化に向け力の入るところでもあります。

社会は変わり、人が変わり、家庭も変わりつつあります。社会性により孤立化し、子育ての方法に悩み苦しんでいる乳幼児を持つ家庭や母親も増えています。そして、子どもはその与えられた空気の中で育ち、将来を担わなければならない人材へと成長していかねばなりません。幼少の子ども、もしくはこれから出産を迎えるご家庭まで含め、地域とともに子育てと教育を行える環境強化に努めなければなりません。保と幼の二人三脚によって、そして、そこには子育て支援とともに「育てる側への教育や手助け」も備わることが大前提。「預けてはいるものの、本来、最大の保育者であり教育者は家庭なのです」と、子育てへの大切さや理解を訴え、理解し合い、助け合うという基盤づくりを進めるべきかと思えます。そこで育まれる価値・感覚は、小・中・高、そして、未来へと永代つながっていくものであり、その環境を経た子どもや、子どものみならず、後に集団社会に子どもを送り出す側である親の変化は、それはいずれ、地域を変え、日本を支える大きな力として広がっていくことと思うのです。各市町村の今後の方策においても、「地域それぞれの実情に即した」という大変難題である課題を抱えつつも、広まる子育て・保育・教育への概念に対する懸念を改善していくために、行政は極めて長期にわたる計画の上で子ども・子育てのシステムを構築する努力をし、また、家庭をも巻き込み、時に保育と教育両面の概念を変える勇気をもって新たな形への構築を実現して欲しいと切に願うものです。保育と教育は分断される理由はなく的確な連携と継続が理想です。昨年6月末には、議会を控えたばかりの都議会議員の方々数名が来園して下さり、色々なお話を受け取って下さりました。また、幸いにして、「子育てするなら東村山！」を掲げる東村山市の子ども家庭部の皆様に際しましては、保育と教育両面に対するご理解とご尽力頂いている前向きである姿勢を心より感じ、今後の施策にも期待しているところでもあります。就学前のみならず、小中高、そしてその先、さらには、「地域や人」へと効果を発揮する就学前教育・保育の理想的な整備に向け期待したいものであります。

「幼・保と家庭、そして、希望ある明るい社会へと流れ行く連携を目指して」。当園単体での実現など全く不可能であることはわかりつつ、草の根であっても、それを実現し、発信し続けることを怠らないことが、何よりの改革への希望、第一歩だと信じ、執筆させて頂きました。

**「保育の役割」** 子どもは温かな家庭での愛情の基盤の上で情操の安定を築くと考えます。外での頑張りや緊張に対し、子どもにとって適切な時間を、心と体の休まる家庭的空間の中で過ごすことで、子どもの体力や精神状態のバランスは保たれます。しかしながら、就労支援や様々なご家庭への支援も必須。それら、ご家庭の代わりとなり長時間適切な環境で預からなければならない場、その役割を果たすのが、保育の役割と考えます。

**「教育の役割」** そして、学び舎である幼稚園に通い、集中力や頑張りどころに狙いを持った慎重なカリキュラムに沿った教育時間を経験します。法に定められた4時間という教育時間は、子どもの年齢相応、体力や集中力に応じた適切な時間かと捉えています。課題と克服は、将来の宝。だからこそ、時に緊張感や厳しさという、将来に向けての厳しさを乗り越える耐力を与え、養うことができるのです。それは、就学に向けても必要なこと。その役割を果たすのが、幼稚園の役割と考えます。

**「幼児期教育・保育の改革は国家戦略です。」  
「本質に目を向けなければ、この先ずっと変わらない」**

明確な努力目標と具現的実行